

会議名	肉用牛研究会公開シンポジウム：中国地域における黒毛和種繁殖雌牛の少頭数放牧技術開発の現状と展開方向
開催日時	平成19年10月25日
開催場所	島根県大田市 島根県立男女共同参画センター
主催者	肉用牛研究会・近畿中国四国農業研究センター
参加人数(概数)	80名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>シンポジウムでは次の講演と質疑討論が行われた。</p> <p>1 耕畜連携から見た中国地域の肉用牛繁殖雌牛小規模移動放牧の現状と推進方向 中国四国農政局 平尾正倫</p> <p>2 黒毛和種繁殖雌牛の少頭数放牧を取り込んだ集落営農の展望について 広島県東広島地域事務所 石倉典子</p> <p>3 なぜ今、山口型放牧なのか ジャーナリスト 吉田光宏</p> <p>4 近畿中国四国農業研究センターにおける黒毛和種繁殖雌牛少頭数放牧の技術開発研究について 近畿中国四国農業研究センター 山本直幸</p> <p>5 黒毛和種繁殖雌牛の野草地放牧時の代謝プロファイルテストについて 家畜改良センター鳥取牧場 渡邊貴之</p> <p>6 獣害回避に及ぼす和牛小規模放牧の効果について 近畿中国四国農業研究センター 井上雅央</p> <p>7 中国中山間地域における黒毛和種繁殖雌牛の資質改良について 全国和牛登録協会 福原利一</p> <p>8 総合討論(司会 近畿中国四国農業研究センター 高橋佳孝)</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題	<p>このシンポジウムのテーマである少頭数放牧は、小規模移動放牧、水田・里山放牧、日本型放牧、山口型放牧などともいわれている。山口県の畜産試験場で1980年代に水田放牧として技術開発が始まったもので、その効用が評価され徐々に普及している。始まりは転作田の利用であったが、その後は水田に限らず、広く耕作放棄地、未利用里山にまで応用は拡大している。</p> <p>今後の研究分野として重要と思われる研究課題は、発表課題4の山本直幸氏の発表内容に網羅されている。すなわち、繁殖和牛の移動放牧における栄養管理技術。この中には植生動態の解明も含まれる。排泄物による周辺河川の水質へ</p>

	<p>の影響。(これまでに調査した3カ所ではpH, BOD, 大腸菌数、全窒素濃度のいずれでも異常は認められなかったそうであるが、当然これにはサンプル地点の影響が大きいと予想される。) 脱柵防止法、ひ陰効果の検証など。このような技術問題はこれまでの放牧研究でも多くのデータの蓄積があり、目新しいものは多くない。</p> <p>少頭数放牧が普及するために重要なことは、ソフトウェアであると思われる。少頭数放牧の効用が言われながら、広がり点では未だ不十分で、多くの耕作放棄地が文字通り放棄されているのには恐らく技術ではない問題が多々あるであろう。技術研究もさることながら、今後は社会科学的研究の充実が必要だと考える。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>発表課題1で、平尾氏は幾つかの興味ある統計数値を示していた。平成17年と18年の比較で、全国的に放牧地が1100ha増加し、うち320haはいわゆる少頭数放牧用地であった。中国四国地域では、少頭数放牧に数えられる牛頭数は、平成16年の1400から平成18年の1800へ増加し、面積は315haから643haへ倍増している。この間元祖山口県における面積は110haで停滞しているのに対し、島根県では76haが316haに増加している。</p> <p>発表課題6で、井上雅央氏は、獣害回避に及ぼす少頭数放牧の効果について、牛が採食することにより、見通しがよくなり、イノシシやサルなどが警戒するようになることが、獣害が少なくなる原因と述べた。馴れば、イノシシは牛と一緒に放牧地で採食し、牛のそばでも穴を掘るとのことである。また、イノシシやシカが増えたのは、要するにエサが増えたせいであり、イネの再生株、冬でも緑の野草、農場残渣などが集落で増えていると述べた。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	
<p>5. 会議の所感</p>	<p>一連の講演発表を聞いていると、小規模移動放牧は結構づくめの感があり、行政もかなりてこ入れをしているようであるのに、なぜ放牧頭数、放牧面積とも拡大ペースが遅々としているのかが腑に落ちない。本当に結構なことなら、放置しても普及拡大するはずである。どこに課題があるのか、さらに研究が必要と思った。</p>
<p>報告者</p>	<p>松川 正</p>